



伊地知文庫
文庫20
343
2



續猿蓑集

伊地知文庫
文庫20
343
2

續猿蓑集

文庫
343
2

續猿蓑集卷之下

春之部 花梅

伊地知氏書冊



書落沾

温ふのあさきおまやと山梅	其角
春霞ふに又さか内々おま	芭蕉
歌ふぬちの向もあこころ梅	洞木
ちう通物木の般うらなぬのふ	花梅
角の流くまか	

集猿蓑續

花散て竹らん軒のやすまはる

酒堂

富貴はら酒名よあまらて文君
の血も七醉のまゝなれよ思ひ
こゝろはなれ

酒名はよあまの考まゝ空の花

惟然

賭みして後あまれりしつづ

支考

人のまもわく霞のしづ川橋

近徳

らんらや野中一のたの水面

猿錐

七川より花らんおまはす申の

陽和

らん所おまはるやし川橋

乙洲

咲花をあらうきぢら老木外

木菰

家橋やあまらるまはる川橋

浪荷

二の解やまゝあまらる調の臺

子珊

美玉のあまらるまゝ橋の形

卓袋

田家

花弱の名おまらるんかぬ橋

木子星

咲かゝる花や飯まゝ十石

柶着

心よ花のよし 木の根より
 ちり木の根やあつき花の露
 花をよきまきし飯合世に金流
 くれやうんまき床あつた花の喜
 ぬりまき世の志あつた軒の花
 一目を花のあつたやうに花
 八重様よめも花あつたよめか

一桐
 如雪
 其角
 一法馬
 貞良
 法圃
 全

若菜

濡縁内を跡をちりく上りゆく
 ろの跡やちりぬのちり若菜の船
 夕波の船よちりぬのちり若菜の
 一かぬの牡丹をちりぬのちり若菜の

龍寺
 曲おき
 孤屋
 尾頭

梅 附柳

春もやちりぬのちり若菜の
 夢よちりぬのちり若菜の

芭蕉
 野水

守梅のあらしひ業ありり野老賣
 其角
 里坊の碓まきやせり免の色
 高唐
 投入や梅のわきそは流のび
 良品
 病憊の色もれ梅のさかき
 曾え
 あらしにぬき置あしこし梅を
 万平
 梅の縁さして下弦の縁
 魚目
 きく梅やきくしなまなむあらし
 千川
 霞所や梅のよあひまきめて落ん
 大冊

天竺のやー海に流て

身はまよと行きや梅の籠ま
 遊糸
 るれし此勝のなりやまゆ柳
 千那
 時こそあまうらり川やなま
 意え
 りう道を教へりや古柳
 李由
 青梅のまきれくせや馬の曲
 九之丸
 端をうけてるあまうらり梅うね
 巴夫

鳥 舟 魚

美史

其角 ナカノ 其角

史邦 史邦

智月 智月

芭蕉 芭蕉

去来 去来

酒壺 酒壺

傘下 傘下

長紅 長紅

まろむや葉よはくやん雑子の
駒の月のさやも何にも根の
くはるはきつる似合 さい白紙を

燕や田をわたりかつた鳥の羽さ 野童

巢の中や母を御しておや燕 ツ年 峯嵐

雀子や姉あもくひり 雛の棧 槐市

籠うらにならる雀乃子飼ひ 何瓢

り鴨やちあ湯よはれての磯情 釣帚

草野とあ何乃 釣帚

鮎の子孔ふよよ海 浪の音 土器

わけらめき共よららら 水鏡外 圃水

きしほのしめしめり波あらし
白魚のきしほよふとほしめしめ

子珊
山蜂

深川よあらしめ

きしほのきしほよふとほしめしめ

其角

まじりて

おしりてとせしめしめり波あらし

正秀

おしりてとせしめしめり波あらし

け筋

おしりてとせしめしめり波あらし

羽紅

川流や波まよひしめしめり波あらし

猿雖

勇のまよひしめしめり波あらし

扇指

味ひや梅のまよひしめしめり波あらし

車来

最きしめしめり波あらし

荒雀

堤ありしめしめり波あらし

馬寛

疏あらしめしめり波あらし

拙依

ゆめめしめり波あらし

乃龍

早蕨やまよひしめしめり波あらし

正秀

まよひしめしめり波あらし

夕可

月の影よ猫の爪は栲屋穿い
浦の英や葉の光をくぐりぬ花
一桐
圃菔

橘虫 附胡蝶

家路や月よりひびく橘の虫
うよ虫よくめてや橘の盗喰
おもひこころに里もあけらぬ橘小
探丸
支考
已百

白鳥川うた

やまもりても翅を動かす胡蝶の形
柳樹

衣更急のくまやをきく蝶の舞
蝶の舞おつら様よくくあつた
風吹よ舞のやまをく小蝶うた
こぼれして花みちりて切蝶ひ
雪窓

春鹿

振るりりや度解の鹿の角
沢雉

五五耕

お福のちをばあてをくくく麻
木立

後表下

苗れや三途とよ此看月お
千川り回さかつはかり遊ば人
一平

栂 附 椿

白栂や志川くもるはあのを
金栂をささぎ盛り栂のそは
依んくく事栂の上の表のを
栂はくく申さくあまは栂のそは
花さくく栂や奇舞妓の脇躍
其角

江東の事由々祖父の懐のほろもた
わのし経文題のち川るし一休院の
光のそくあまを

小服綿み光をやと路むはほは
栂を枯てさるは花咲栂のそは
取あけてるるや栂のそその元
らく栂のそりもろくは栂のそ
野放

歎々 附 躑躅 藤

山吹や垣み千くは裏一千里
園坊

田家乃くよ對して

山吹もあろろ 紫の孔 舞ひまは
堀おとんは ぼく 孔株や 舞のま
家時や 植まよ ぼく 家のま

まき月

山の端まらり ぼく かりまき月

魯町

まき月 春雷 蛙

拍のまき月 草のたまり ぼく かりまき月
鳴き 調子合 ぼく かりまき月
まき月 唐丸あろろ ぼく かりまき月

龍乃 游刀

まき月 かりまき月 武にめ
猿と店まき月 かりまき月

まき月 木ら 何ら ぼく かりまき月
まき月 木ら 何ら ぼく かりまき月
まき月 木ら 何ら ぼく かりまき月
まき月 木ら 何ら ぼく かりまき月
まき月 木ら 何ら ぼく かりまき月

まき月 柳首 風暈 風暈 直

波干

乃あり枕の清海くまぬ及平水

去来

ふ川よ富士の麓をよ志おひの

園坊

雑春

出かたりやあしれ物うし加性

許六

あつちのやあしき物う桐乃留

風睡

思おこの松のうらやわりく縁

土芳

つけうのや麓の腰の柳ちめ

配力

わまはちあむらのうらや源治の家

万平

あしき物うあしき物うあしき物

女界

あしき物うあしき物うあしき物

坊水

あしき物うあしき物うあしき物

正秀

あしき物うあしき物うあしき物

仙化

あしき物うあしき物うあしき物

支流

三月廿二

あしき物うあしき物うあしき物

支考

年旦

さるのやもたふらふらふら

武仙 サキ

遠送を舟のすゝれ立所外

百歳

そらや難と云ふての 甲斐に

高市

遠東のやふらふら 螺の貝

團扇

母方の夜もさるら 也 東の船

山崎

はよふらふら 雲を鯨魚と云ふ

つらふらふら 文のちむ 侍れ

え日やあふらふら 云の

千川

人ともぬまら物後の

芭蕉

明らおのちのうら 娘のあふら

其角

様のせに 孫まつら 也 雲のほら

山嵐

雲のせに 孫まつら 也 雲のほら

去来

雲に 橋をすら 舟のよら

土芳

く川まら 也 舟はてら 舟のほら

風騷

みづな 孫を

あつ けし

えら 舟のよら 舟のほら

猿轡

子行ゆきす川曲燈やさきう〜ふ
背さう〜あやあきんきとや花の
薫る葉のきふたんとし白尾の羽の
縁の着負のな〜まきあ〜ゆひの
う川喜やゆきき後の中丘を
枇杷のきふのう〜ん悔やゆきあ
世の業や髪きあれともさき
濡いろや大あ〜〜けのゆひの

鳥平
町
研雪
九板
前川
料巖
山崎
任行

えゆゆあや〜〜うやよ梅のみさ
我やゆきう〜〜に鏡す〜めりり
搦葉や蘇あや〜〜れる花志
魚わ〜のろ花目よ似〜り花う〜

竹下
是系
沾圃
圃角

ゑゐく部

郭云

其ノ用

曉の雲をほくぬやち〜

けと〜ぬやちぬや潮水のと〜

あ〜はゆや何をもほゆみち〜

蜀罽噲ぬお志し〜

吟流の名あやれ〜

燕の居ち〜

玉子

曹尼

支考

如雪

其也

泣くもつゆの雨よなげし子親

けうをるふ山の栴麻めて

順れり吹し通りらるる

神ふかき心の森や申やとり

沼圃

木附草花

橙や月あつめぬころるあふこ

園指

聖ししの次ずらりぬき川あふら

野萩

園中二句

は甲の右末をり川ぬ掃のる

け論

手切のちと木も柿のさきふけ

千川

娘百合や上りりさめは蝶のふ

赤龍

豊山家く百合

あつちややあつちやあつちやあつちや

支考

山もんよのあつちやあつちやあつちや

尾張

冷汁をあつちやあつちやあつちや

活圃

色のもんよのあつちやあつちやあつちや

伊加 伊多都

ふらふらや 茄子のたれを先く

~~~~~の元奥

拙後

昼のや 月をうらめしむる蓋

沾圃

夕刻や 酔てふらむた意の尻

芭蕉 云人

夕刻や 裸ておきておぼろ

嵐蘭

藤の花 おらうとあつらへに

妙香

菖蒲の花に おこし水の濁り

十筋

蓮の花を やらうと おろそかに

白雪

客あらし 廿二の蓮の鏡おとん

良品

凡

朝露よ おとれて 瓜の玉

芭蕉

姫ゆきや 袖よ入ても 音も

至曉

なん

藤ねりや 藤をあらぬ 牡丹

風弦

子苗

多良下

京入やゝる舟の風柱の響の中  
 早乙女も控んでやゝんまのゝめ  
 婦とら男の控おられゝる子窓外  
 風柱奇あてちゝる影の汎し  
 一回はくひめりりてやゝめのみ  
 里の子ゝ懸揺る子窓り船  
 改き火の烟そそくあゝるゝる

と時 知七  
 扇指  
 魚目  
 童り  
 水枝  
 芝草  
 許六

螢

之日月にまの螢を照みりり  
 野萩

網涼

涼し竹揺りり萩はくひ  
 可葉花や唐葉にあふ夕涼  
 半銭  
 唯然

舟の度み昂て

涼し竹揺りり萩はくひ  
 可葉花や唐葉にあふ夕涼  
 半銭  
 唯然  
 史邦  
 色翠  
 牡牛

後表下

涼—さし牛乳尾振て川の甲

万幸

漫真 三句

腰かけて申に涼—き階子外

酒堂

涼—さや椽より豆をぬくまら

支考

生碑をゆらゆらあらし涼うら

雪芝

とくびるぬき

草屋ふお母まで

涼風もあま—と碑のこつれ外

游刀

いそが—夷申をぬけとら涼うら

全

立阿のく人よあはれてすくく南

去来

黙神よこまら涼—やゑの上

正秀

穢人の惟子こまら涼—夕まらみ

土芳

涼—さや一さね穢の風もあはる

我眉

お涼やさしひのん世を月あま

里圃

盛三句

おこまらや照らあこまら—庭の隅

野菰

木子盛らこまらのちこまらの暑外

万幸

取置者のひさしとせしめ

よそへてはく

うまのいもやを遠くして味冷の思

正秀

取置の西のあつたや梅はくひ

乙州

煤とらち目と盛つて一と名新

怒風

女流の垣もきあふぬ暑有る能

尾張 妻峯

糸のさや置有る月にあつた

我峯

何のふれもふをくたはれあは

平吉に

積あけて思ふよはたまた思ふ

貞吉

粘りやう飽もよおの宿つさう能  
立寄れをすしとらやの暑

里東 匠園

糸のさ

昔に思ふさうく岸の宿くま

可誠

そりや烟のい川ら庫裏の意

曲翠

五月雨附々立

きつはらやもさうのやうに徴の  
さうはれや舞がめ葉乃烟

あ羽 不王 芭蕉

みづもや 踵のしほ 女 蟻にま

夕立よここ 合傘り 自傘

白もや 蓮の葉のしほ 池の 草

夕立のやちり けいけい 行の皮

ゆめまら 傘から 空やまの所

蟬

白もや 中房り 蟬のぬし

まじりて ぬして 去りて けいけい

後表下

一七

森の蟬 涼し 下ぬや けいけい

らん

露の目や 潮こちり けいけい

雑

夕立のやちり けいけい けいけい

まのしほ けいけい けいけい

ま 獲と けいけい けいけい

後表下

一七



穉う部

名月

~~~~~

名月に蘇麻の葉や回の~~~~~

名月の花を~~~~~て棉を回

~~~~~光何葉の~~~~~て名月の  
~~~~~の二句を~~~~~て~~~~~  
~~~~~非~~~~~と~~~~~に~~~~~  
~~~~~月~~~~~根の~~~~~  
~~~~~~~~~~

~~~~~

~~~~~





あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

あつちのきんぎょのついでに月

山も此ら川もも満めや  
宇比

名月也里のゆわいのまき  
木枝

場に居て月見か  
利合

明もやあつわ  
丹楓

明もや何もあら  
野萩

船入り客よ  
正秀

信川の  
舟子

舟りのるわ  
舟子

待宵の月に  
景柁

家よら老女とらふ  
お監り

お監り  
おね

姨捨  
依圃

露おきて月入  
馬芝

空うら  
里東

月影や海の方  
牧童

續

書

保川の東ふたねとよみ所よ  
おとろしーて

川ふかこの川きもや月のな  
芭蕉  
十六おきり川うら園のゆめ  
全  
さよひの園のるもやういふた  
猿雖

七夕

うめゆめあまのうのあまの河  
惟然  
あまのうもてあまの朝  
帰るふ  
船のゆきうらやわがね  
東潮

あまのうもてあまの朝  
惟然  
あまのうもてあまの朝  
帰るふ

あまのうもてあまの朝  
惟然  
あまのうもてあまの朝  
帰るふ

立秋

あまのうもてあまの朝  
惟然  
あまのうもてあまの朝  
帰るふ

稲刈り

あまのうもてあまの朝  
惟然  
あまのうもてあまの朝  
帰るふ

チヨシタレハヒメ馬骨の安サ  
まゝにたれし鴉後の杖のくまの  
一篇をうたふ風よちり 烟を  
うら園とら比たれやなまら海  
支浪

贈芭蕉

百合をうたふ夏夜をうたふ余  
はの娘のちやうともはしは  
枯のちやうともはしは  
史記  
万平

鶏頭や鳥の森の時たふあ  
鶏頭の森の夜をうたふ月影外  
折ししや雨声にまゝは枝の  
苔花をうたふは動く秋の風  
山人のうたをうたふは鳥の  
風をうたふはうたふは鳥の  
芭蕉  
至曉  
雪  
荷  
桃  
下

朝朝の空をうたふは鳥の  
田上尼

芭蕉

芭蕉



穉風

秋の路や二事田に...  
 雀子乃蟹も...  
 何やうか...  
 松の...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

穉妻

独りて...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

後藤

...

秋を和目私らるる尾拵のり

はぬしやと帯ふもろく極く

ま川草也塩もも清尾一盤

伊豆の山中は河渡の  
第2版を録して

松草也起るありさ山の形

~~某物と推して  
月夜と云ふ~~

す川草也まぬ木の葉の層より

楓

後尾の塚よとれり村の

麻

麻すおにやおの麻也海の方

麻からしよ麻おろる守

農業

起しはくを迎ひり

木の下に程やあつた穂

とほくけらるるりめ

此等の字は  
此の字をとりて

酒堂

きつ

沼圃

惟然

芭蕉

小龍

比隆

一敵

車庫

買山

知雪

芭蕉  
 乃龍  
 斗從  
 支考  
 全  
 惟然  
 本之  
 俗圃  
 其のまゝに  
 早稲刈て  
 山雀の  
 有りよ  
 一おれの  
 肌  
 百なり  
 その  
 大い  
 其の  
 大い  
 其の  
 大い

二葉

葛原  
 溜子  
 支考  
 野塞  
 小亭  
 暮秋



唐江也背負ふて海を秋の暮  
り秋を鼓うの京の恨、船  
りあまやうきを船りけうう物果め  
野水 乙州 芭蕉

雜稿

又六十海をこの舟して般いは一  
つ葉わくはれゆはゆ舟を松の中  
あゝ海鳥の啼くあつたおきうな  
ある故や忘れぬ時を秋の暮  
之道 團友 畦止 日友

男婦多しに霞のさちち、靴外  
さうわや穠うぬさぬの葉お  
柿の葉かた焼くを葉うん尾葉有  
いゝる馬、空に骸骨やうも  
の笛鼓あつたあつて御よるや  
やまを盡して舞臺の燈  
うまうりあつたに生あ  
あつたあつたあつたあつた  
よ舞うんやかの髭髯を  
ううううて舞うまううう

五葉下

正



平押みなる回らうけり  
 葉賣地はくまの葉廻り  
 梳賣ももよ草履の地  
 穴熊のもてきりぬ  
 文らわや鏡あつら  
 ぶよ並て唐郡をぬ  
 柿包は日あや  
 ちりきりて里を

野明  
 園指  
 空牙  
 ぬ有  
 鶏口  
 野萩  
 夜川  
 里圃

仲西の能目くり  
 くのちのちのち  
 支考

佐圃  
 水鯉

元禄辛酉うらめ  
 九月廿五日遊園遊

空留の雲を  
 ちりけり  
 ちりけり



うら—とぬ響くや作ぬ響のな

車窓

草 附木

水伝や露幄りぬ 月の透り

曲翠

ついでに〜く 嘆や草ふからの水伝花

氷固

水伝のつたの〜これや藪原

唯然

正記 録 蝕り 趙南の

山家 佳木の 野よわらふ

一落も〜ちとぬ〜果の氷〜南

芭蕉

山〜果花をえ〜り 閑〜ゆり花

車廂

み〜梅の虫〜川ゆ〜川ゆ鳥の

土世方

ふ〜果うたも〜るてや 雪に存様

露堂

木々 附冬枯風

お〜ひり〜木の葉ふら〜おや 露の

沾徳

星〜と〜て 江の 甜〜〜 草の 露

露沾

冬川や木の葉ふら〜い〜い〜のり

唯然

後接

接

林藤より足さつりあさあの新葉外 秋風

いば枝路字比の

いばさしめしはて

とらふり先かていさなまふの 一道

枯さていばよさらばもいさく 杉風

牛のり送る枝路のいさく 柳醉

冬枯にまふまていさくなはて 乃龍

若干枯みさく川てまふいさく 利半

即ち枯てのいさくおさく 支考

毛猪の首

木がくもいさくもいさくあもいさく 智日  
風や背中吹らく牛らあさく 風介  
木枯や刈田の畔のいさく 唯然  
さかすいさくあさくいさくいさく 塵生

夷講

あひす梅酢賣み禱るいさく 芭蕉  
さかすいさくいさくいさくいさく 利合

後集

六

鳥 附いま

乃々の海をこて

塵埃よめぬ目もぢり浦の 白空

追うけて雲よころか千のの 葛草

かおらとと庚申やら花の形 ぶら

入海や碓の釜に常千を 扇柄

敵<sup>カコロモ</sup>にけりてぬく一鴨乃は 芭蕉

と川鴨を大遠くくははる 乍木

枚はよころい入つよは海嵐を 三人 利雪

ううしや海月よまあるちのの 車扇

えく透や子持ひわのうに氷 付水

一塔よち川魚や雪の前 杉風

かくぬ川や眼をぢりて降雪 拙浪

杜夫魚を河豚の大ききて水上はあふ  
那の川よのこあろくをやう

冬月 附合

後藤

世

管とのや門賣ありくみの月  
あゝ橋のかけわた軒やみの月  
何ぞもそ痛入るまてわり弾ぬる月  
ふ他や行をぬれを江の月

埋火

埋火や母を客の歌あり  
佛一さるゝあゝ念をぬるる火  
自由や月もぬれを江の月

里圃

支子

カ春

支考

芭蕉

桃先

同本

雪

幼雪や行に橋あり夕アラス  
おゝ雪や月雪くす酒の味  
雪あゝれ心くするをさか  
鳥鶴やぬれを江の月  
雪垣や志ぬれを江の月  
ゆゝつ子もぬれを江の月  
片雪や雪降あらすを徳

其角

全

夕景

祐甫

芭蕉

支考

圃吟

後集

共



馬の尻のそとを月枝のあな  
髪を刺し降しあるちりけ  
伊加え大和のちりけ  
配力 陽和

神樂

お伊弉に萬もかきおなま  
史邦

神さしよ

合付やうりり子の神  
神あは干鉢賣すすちり  
娘入のしりりり神さしよ  
痕を送りたる神さしよ  
路車 馬見 許六 伝團

煤掃 舟辭

煤掃やあははよわのちり  
そとを隣のちりけ  
孫香 黄遠 深灣 馬見

後集

七

蝶々もやわりもれておろすやち〜  
 蝶 掃也折る一牧疏〜  
 餅つゝや火事かたてり男を  
 餅は〜やあ〜の〜  
 ちり搦の手傳ひよ〜  
 歳暮 附言 衣配  
 とぬらた返も海きの市の〜  
 所砂やすまて志〜の洗ひ髪  
 馬佛  
 嵐水  
 惟然  
 自如  
 里東  
 角丸

賣るやと〜も〜  
 袋もあよのちり〜  
 大子や親子き〜  
 袴もぬ〜  
 年の市街を〜  
 お〜  
 引〜  
 桶の輪のち〜  
 草土  
 連糸  
 万半  
 李由  
 具角  
 正秀  
 菰子  
 猿錐

後集下

罪

六鶴毛のさしぬさかしてのき

惟然

後秋の葉を踏むてさしぬさか

けろを圖司呂丸り舞と呂ありあはれ  
のさしぬさかして伊勢まもりあしてはらぬ  
いさぬさかしてのさしぬさかしてはらぬ  
あして今をたぬ

くささか

盗人のあつておもあつてのき

芭蕉

余所よいづてさしぬさかのき

支考

漸にさしぬさかの甲

土芳

さしぬさかの弱りてゆきぬさかの甲

高石

さしぬさかのゆきぬさかの甲

柳後

裁削を末の子さしぬさかの甲

山崎

一志さしぬさかの甲

利合

雑文

小原風に葉を挽くさしぬさかの甲

軒巖

拙作よ河風を挽くさしぬさかの甲

土芳

井のあつてあつてあつてあつて

土下

後巻下

仙杖  
 土龍  
 雪堂  
 二谷  
 佐園  
 杉風

釈教之部 附 追善 哀傷

涅槃木

涅槃木像ありふき身も同なり  
あつた  
 福とん命の般年合々殊所の  
あり  
 山寺や猶守るる所なる像  
 貧福のあらしむるも涅槃木像  
 法圃  
 芭蕉  
 不撤  
 山蜂

灌佛

後下

権佐やけいけいあつあつ井戸の  
家花や御うすれて二と目  
権仰や親迦と程婆之徒弟と  
之道

云思及事

冷おももな水とけい— 禊あり  
平保乃々々のあこし— やうき禊あ  
やは法や坊とひるよふとあ  
法圃

甲戌のな大津み侍—きこの

かゝの—より消息き—れりれ  
と四里みぬりて盛會よ—  
さゆき—なほまき—繁の墓系  
芭蕉

悼少年 二句

うわ—と物麻木の葉もかきぬ  
その秋をきりぬ—のふを秋の風  
支考

うほ—と  
若のたを稀葉のさくらこの時り  
木暮

後集下

さくら木 桶もあやと皮桶の水 去来

法苑珠林

柚も柿もおうまぬめり 法苑珠林 法園

臘八

鴈もさくらりてんれを 粥豆汁 許六

何のあれかのあまよりあまを大呼海 如行

洛東の真如堂に——して  
善光寺 如來肉帳の時

涼——と聞かぬよさうはさぬわい 去来

みまもあまのこにさき——けり 智月

ひ——煙や家ま川よりて 乙州

このふに川趣向小也富さま 予知

手まも——に朝の月涼——るゑい 野坡

食堂に雀啼——たり夕時 支考

後表下

旅く部

送別

え禄七手の交々々々々の

あまをん送りて

あまぬりに隣居のらん世のふくね

荷号

あまぬや柿喰ひあひくちのど

惟然

許六

本常海におもひくち

旅人のちくちくも似よ推のた

芭蕉

留別

後の惟然々空あり

左帰めゆる時

崩やもあまの草ひまかへり

文子

鮫の子れまゝ魚送るふのけ

芭蕉

甲斐のこの母よ泣く時

かゝ坂のらむにかなて

年ありて牛にやうりらるる草花は

木暮

縮つはあはせまをたうる花は

野人

めくもたうらゝる川橋の旅の白

野住

毒の國めおもしろ

まゝのこのまゝいふまで

ろれくまを谷に地なりけりわむ

公卿

十圓ものわははあちらぬ秋の風

許六

大名の百餘なりにもあまの

全

くはははは

くろくもあまのまゝのあまの

魚丸

はくくもあまのまゝのあまの

猿雞

あまのまゝのあまのまゝの

我峯



おのちのいほをきておのちあり 一 孫の馬

史邦

田國の心さきし衛く存勢の

父之志の海ちりけき秋涼

立人  
呂丸

我 蒲團つゝの孫の遠く船

佐團

常陸の國がーあひひらあ祈の

おのちの心さきし衛く存勢の

おのちの心さきし衛く存勢の

下りあひひらあ祈の

あひひらあ祈の

根のち味ら情や梅にせは粥

支考

と川魚や道よらうか枝もと

全

え禄と事のあき葉津の事あり

あり赤にまおもらうとて世の

の驛やちりまにいらて

ちりまにいらて

宿かりてあまの心

あまの心

後巻下

四三三

續猿蓑を芭蕉翁乃一派にす  
何人の機をいふを志すに於て此の  
傍伊賀と聲を聞かば見れば尾の  
此神子あり某處にありて  
漸く日本のやまをゆく  
世に廣くありてゆるりゆるり書中  
或いはあけ—あるいし入るは  
くはるはる年福のすまじ

一字は...  
可書...  
とふも...  
後掲  
早秋

元禄十一

又日...

から...  
一...  


